

保健師 最前線

“必要性”が伝わる

話し方がしたい

城陽市

岸 麻理 さん



城陽市の保健師になった理由は、「城陽市の実習に行った人がみんな、職員さんが良かったって言ってたんです。実際入ったら本当にいい先輩に恵まれて。」

そう話す岸さんも今は城陽市の保健師の中で2番目のベテランだ。保健師業務も一通り経験してきた。城陽市では業務分担と並行して、地区別の小学校区分担制(全10小学校区)も取り入れている。現在岸さんの仕事は、全校区の特定保健指導・介護関係の集計や事業計画を行う業務(事業分担)と、青谷小学校区の母子・成人の訪問や健康教室を通して健康づくりを行う地域担当(校区分担)だ。

「業務担当として気になることがあれば、実際訪問に行くのは校区担当者になるので、常に業務担当者と校区担当者が連携しながら事業を進めていきます。」

同時にあらゆる業務を把握しなければならないので大変には違いないが、保健師一人ひとりが互いの業務を協力し合うことで、自然と対話も多くなり、チームとしての一体感が生まれるのだろう。

これから力を入れていきたい事業は、生活習慣病重症化予防のための個別訪問活動だ。

「大人になると各々の事情や症状が違うので、効果的な指導も変わってきます。これから始まる今年度の訪問活動について、保健師全員で話し合っているところなんです。」

生活習慣病は発症前の自覚症状がほとんどないので、予防に対する住民の反応は鈍いが、まずは重症化予防に取り組みたいと思っている。理想は、病気を悪化させないように自分でコントロールする意識を持ってもらうことだ。

「どうしたら理解してもらえるか、どこまで分かってもらったらいいか、知識だけじゃなく、必要性が伝わる話し方をしたいと思っています。」

住民の方が健診結果を見て、自ら生活習慣を変えたり、「放置してはいけない」と医療機関に受診された話を聞くと保健師冥利に尽きるという。

とても気さくに話してくれた岸さん。主任専門員という肩書だが、「私の方は若い保健師とも、世代のギャップはあまり感じてないんだけど。」と笑う。そんな岸さんの人柄も職場の風通しの良さに一役買っているとみた。